

# MUSEOLOGY

実践女子大学  
博物館学課程

*no. 45*



# MUSEOLOGY

## CONTENTS

---

### 卒業生による活動報告

サンリツ服部美術館	藤生 明日美	1
ただみ・モノとくらしのミュージアム	原永 円香	4

2025年度博物館実習先一覧	7
----------------	---

### 博物館実習報告

さいたま市立博物館	8
袖ヶ浦市郷土博物館	9
府中市美術館	10
実践女子大学香雪記念資料館	11

梱包実習報告	14
--------	----

博物館学課程の受講について	15
---------------	----

## サンリツ服部美術館

2007年度資格取得

藤生 明日美

### サンリツ服部美術館について

サンリツ服部美術館は、セイコーエプソン初代社長・服部一郎が蒐集した美術品とサンリツ企画株式会社（現 株式会社サンリツ）が所有する作品を広く公開することを目的としてつくられました。一郎はルノワールやシャガールなどの西洋近現代絵画に関心を寄せ、仕事の傍ら熱心に絵画を蒐集していました。また、父・服部正次より受け継いだ東洋古美術を散逸させることなく保存し、多くの人々が楽しめる美術館というかたちで作品を公開したいと望んでいました。残念ながら一郎は志半ばで亡くなってしまいましたが、遺族である現理事長と館長がその

意思を継ぎ、平成7年（1995）6月6日に開館しました。

建物は内井昭蔵による設計で、「水辺より湧き上がる雲」をイメージしています。諏訪湖の周遊道路に面していることから水平線を強調するデザインにし、さらに湖上からの景観も考え、水面から山の斜面になだらかにつながって見えるよう、曲線のついた屋根を2段に切り替えているのが特長です。館内には2つの展示室と開放感に満ちた喫茶室、ミュージアムショップがあり、来館者が作品を鑑賞しながら安らぎのひとときを過ごせるようなアットホームな空間として設計されています。

当館では、日本・中国の書画、西洋近現代絵画、陶磁器、漆器、金工など約1400点の作品を収蔵しています。その中には、国宝2件、重要文化財19件、重要美術品19件が含まれています。展示室1（服部一郎記念室）では主に近現代絵画を、展示室2では東洋古美術を中心に展示しており、常に古今東西の美に出会えることが特長といえるでしょう。



サンリツ服部美術館外観写真

## 卒業生による活動報告

### 展覧会について

私は東洋古美術の担当として、年に3、4本の展覧会を企画しています。展示する作品は収蔵品が中心です。「何度鑑賞しても新しい発見や魅力がある」「作品や文化への理解がより深まった」と思っていたらよい、毎回切り口を変えた展覧会を考えています。

当館は茶道具の優品を多く所蔵していることで知られ、私もこれまで茶の湯をテーマにした展覧会をいくつも企画してきました。茶道具の展示では、作品を収める箱や仕覆など次第と呼ばれる付属品を展示することがあります。著名な茶人による箱書や添状、舶来の裂で仕立てられた仕覆からは、それぞれの道具の来歴や所蔵者たちの美意識をうかがうことができることから、茶の湯では道具とともに次第も鑑賞されます。令和4年(2022)には、室町時代から大正期までの名物記に注目した「名物 記録と鑑賞」展を開催しました。江戸時代の名物記には茶道具の詳細だけでなく、次第の情報も記されています。この展覧会では名物記に記されている次第をできるだけ展示したいと考え、普段近現代絵画を展示している部屋も使うことにしました。出品作品のなかには、七重の箱に収められている茶碗や、仕覆が9点も添っている茶入などもあります。主役はあくまでも茶道具なので、これらの次第が作品より目立つことがないように、空間作りには気を配りました。この展覧会では、茶道具の価値観の変遷をたどるとともに、次第も鑑賞するという茶の湯独特の文化にも触れる機会をつくることができましたと思います。



「名物」展 展示風景

### データベース

所蔵品の管理や研究、展覧会を計画する上で、制作年代や技法、寸法などが記された作品台帳の存在は欠かせません。当館では紙ベースの台帳だけでなく、データベースとしてFileMaker Proを使用しています。データベースは効率よく検索ができ、あらゆる情報をデジタルデータとして整理保存することができるため、資料の保管場所の確保などを心配する必要がありません。当館のデータベースには作品名、作者、制作年代、材質・技法・形状、寸法、員数などといった基本情報のほか、出品履歴や修理履歴、各展覧会で作成した作品解説なども入力しています。

現在、作品データベースのほかに取り組んでいるのが、服部正次の茶会記のデータベース化です。茶会記とは茶会の道具組が記されたもので、客組や料理の内容、床に飾られた花などを記録したものもあります。正次は服部時計店3代目社長を務め、セイコーを世界的なブランドへと導いた人物です。また、山楓と号し、東京を代表する数寄者として活躍しました。令和7年(2025)に開催した「数寄者 服部山楓」は初めて正次に焦点を当てた展覧会で、同時代に交流のあった数寄者たちの茶会記も参考にしました。茶会記は翻刻されていないものも多く、文献を読み込み、情報を整理していくことは大変でしたが、本阿弥光悦の茶碗や「佐竹本三十六歌仙絵」など数寄者たちが憧れた名品を蒐集しながらも、千利休のような侘びた茶を好み、茶会でも侘びた風情の道具を多く用いていたことがわかってきました。この時は、各道具の使用頻度や時期などはExcelで表を作成し、正次の茶会の傾向を把握しようと試みましたが、道具組や趣向、客組などの詳細な情報を確認するために何度も資料を読み返すことがあり、効率的な面でもデータベースの必要性を感じました。茶会記のデータベースも作品データベースと同じくFileMaker Proを使用しています。項目には、開催日、席主、客、会場、茶道具といった基本情報のほか、翻刻文の項目を設けました。さらに資料のリンクを貼ることで、データ化した文

## 卒業生による活動報告

献資料に簡単にアクセスできるよう工夫しています。正次については今後も引き続き調査・研究を進め、定期的に展覧会も開催する予定です。道具組やコレクション形成の分析、まだまだ増え続ける資料の整理のためにもデータベースを上手く活用していきたいですし、蓄積した情報は未来の学芸員たちの研究や展覧会にも役立ててもらいたいと考えています。

### 作品の保存・修理

貴重な文化財を永く後世へ伝えていくため、適切な環境で保存していくことが、美術館博物館の役目です。日頃から作品の状態を確認し、劣化が進んでいるものや損傷の恐れのあるものは必要に応じて修理します。当館では、平成30年（2018）以降、国庫補助金の交付を受け、国指定文化財10件の修理を行いました。

国の指定文化財を修理する場合、まず都道府県の文化財課と文化庁へ現状を報告し、修理方針等について検討します。修理を希望した絵画や書は、本紙に汚れや折れなどの損傷が多く見られたこと、今後絵の具や墨が剥落する可能性があることから、専門の修理業者による修理が必要と判断され、国庫補助金を申請し、修理を行うことになりました。

修理は東京の修理業者に依頼しました。修理が始まってからも、進捗状況の確認や修理の進め方を検討するため、年に数回、修理会議が開かれます。会議では、表具の交換や修理に必要な資材について意見を求められました。例えば、重要文化財「尊意参内図」（弘安本北野天神縁起絵巻）で使用されている表具の裂が華やかなため、画題の雰囲気と合うものに交換してはどうかと修理業者から提案がありました。この作品は正次が茶掛として使用していたものです。表具を交換すると作品の雰囲気も変わってしまい、正次の好みや茶会の雰囲気を伝えることが難しくなると考え、今回は表具を再利用することにしました。また、修理前の肌裏紙はやや暗い色のものが使用されており、絵の具の色彩が沈んで見えました。今回の修理では濃さの異なる3種の肌裏紙のなかから、作品の雰囲気を

変えないよう配慮しつつも、絵の具本来の明るさを出せるものを採用することになりました。

作品への負担を軽減し、良好な状態で保存していくために行う修理ですが、場合によって形状や表具を変えることがあります。作品の安定は勿論ですが、美術館としてどのような姿で作品を後世へ伝えていくべきか検討していくことも、学芸員の重要な使命であると感じました。

### おわりに

日本絵画史を学びたいと思い、幅広い時代や地域の美術史を学べ、美術関連の書籍が豊富にそろっている実践女子大学大学院へ進学しました。大学院では作品調査に参加させていただく機会があり、ガラス越しではわからない繊細な筆使いや色彩の美しさに度々感動したことは今でもよく覚えています。私は日本には素晴らしい作品がたくさんあることを多くの人に伝えたいと考え、学芸員を目指すことになりました。

文化・芸術を守り、伝えていくためには、多くの人に作品の歴史的価値、芸術的価値を発信し、関心を持っていただかなければなりません。美術館は作品を知り、知識を吸収する楽しさを体験できる絶好の場所です。展覧会を企画する発想力や、様々な角度から作品の魅力を発見できる眼を養うため、日々精進していかなければなりません。作品と人をつなぐやりがいのある仕事であると感じます。



修理会議 肌裏紙の検討

## 卒業生による活動報告

# ただみ・モノと くらしのミュージアム

2015年度資格取得

原永 円香

## はじめに

私は、美学美術史学科で美学を中心に学び、卒業論文は、椎原伸博先生のゼミで、オペラに関する論文を執筆しました。卒業後、美学美術学科の助手、博物館でのアルバイト、出版社を経て、現在は福島県只見町の「ただみ・モノとくらしのミュージアム」で学芸員として勤務しています。

## 地域おこし協力隊から町職員へ

只見町は、福島県の西南端に位置し、人口は約3,400人です。面積は約750km<sup>2</sup>と広大で、本州の町では6番目の広さです。特別豪雪地帯に指定され、2024年度の最大積雪深は、325cmを記録しました。

只見町は、2022年7月開館の「ただみ・モノとくらしのミュージアム」の学芸員を、地域おこし協力隊の制度を利用して募集しました。地

域おこし協力隊は、人口減少や高齢化などの課題を抱える地域に移住し、地域活性化に取り組む人材のことで、総務省所管の制度です。学芸員を地域おこし協力隊で募集する例は、他自治体でもあります。採用後、2022年4月から只見町に移住した私の最初の任務は、3か月後の7月にオープンする博物館の展示を準備することでした。地域おこし協力隊は、最大3年の任期があります。3年間の任期を全うし、職員採用試験を受験、2025年度からは町職員の学芸員となりました。

## ただみ・モノとくらしのミュージアム開館まで

ただみ・モノとくらしのミュージアムは、只見町によって設置された公立博物館で、国指定重要有形民俗文化財『会津只見の生産用具と仕事着コレクション』2,333点を収蔵しています。民具の収集が始まった1965年から、開館の2022年まで、約60年の月日が経っています。以下に開館までの流れを4期に分けて説明します。

〈第1期〉只見町では、1965年から、公民館活動の一環として、民具の収集が行なわれてきました。このころは、高度経済成長期による生活の変化や、ダム建設・水害による集落移転などがありました。不用になり、廃棄されそうになった民具



ただみ・モノとくらしのミュージアムの外観。手前が本館で奥が展示棟

## 卒業生による活動報告

は、公民館の呼びかけによって集められ、使われなくなった寄宿舎や校舎へ保管されました。

〈第2期〉断続的に集められた民具は、調査されることはなく、保管場所を転々としながら残されていきました。1989年に、只見町史編さん事業が開始され、民俗部会が発足、その一環として民具の調査が始まりました。調査が進むなかで、残された民具の価値が再認識され、1990年には、民具整理事業が開始されました。町史編さん室が中心となり、民俗資料調査カードの雛型、民具の整理マニュアルを作成しました。このマニュアルをもとに、民具の整理を行なったのは、只見町民です。マニュアルには、「自分の孫子に教えたいと思うことを書いてください」と記載されていました。そのため、民俗資料調査カードには、民具の使い方はもちろん、思い出や、方言の解説も記載されています。1990年から始まった民具整理事業は、只見町史民俗編の資料集である『図説会津只見の民具(1992年)』の発行によって集大成を迎えました。本に掲載された民具を使用した再現写真なども、町民がモデルとなり、撮影されたものです。ここまで整理された民具は、約4500点で、そのすべてに町民による調査カードがあります。

〈第3期〉1998年からは、国重要有形民俗文化財の指定を受けることに向けた事業（民具保存活用運動）が始まります。収集した民具のクリーニング・整理が行なわれ、国指定のための新しいカードも作成されました。第2期同様、町民主体で行なわれ、実測図も町民によって作図されています。収集された民具の中から、2,333点を選び、『会津只見の生産用具と仕事着コレクション』として指定を受けたのは、5年後の2003年のことです。民具使用経験のある町民による、民具整理と記録の方法は、民具学の全国的なモデルとなり、「只見方式の民具整理」と呼ばれました。

〈第4期〉第3期で国指定となった民具は、指定外の民具と同じ旧公民館に仮保管されていました。何度も民具収蔵展示施設を作る計画はありましたが、すぐには実現しませんでした。2011年7月に発生した“新潟・福島豪雨”に

よって、町が大きな被害を受けたのも、実現しなかった要因のひとつです。旧公民館の老朽化もますます進み、民具収蔵庫の建設が急がれました。2013年に検討委員会を発足し、2016年に基本計画を策定し、2019年には着工となりました。2020年には、新設の民具収蔵庫と、隣接した会津只見考古館を統合した施設とすることが検討され、2021年には現在の本館である民具収蔵庫が連結した会津只見考古館を閉館し、改修が行なわれ、展示棟となりました。そして2022年7月に、本館と展示棟を備えた、ただみ・モノとくらしのミュージアムがオープンすることとなります。展示棟の前身が考古館であることから、考古資料の展示も行なっています。

以上のように、只見町の民具に関する活動は、約60年前から町民主体で続けられてきました。博物館活動のうち、収集・調査がすでに行なわれてきたこととなります。ただみ・モノとくらしのミュージアムという博物館ができたことで、展示・保管を確実に行なえることとなりました。

### 町民がつくった博物館

すでに言及したとおり、当館は本館と展示棟を有します。本館には民具収蔵庫と、みんぐふれあいホールと名付けた体験コーナーがあります。収蔵庫は、国指定民具2,333点を収蔵するために作られたもので、職員立ち合いのもと見学することができます。みんぐふれあいホールでは、実際に収集されたトウミヤイトグルマなどの民具に触れることができます。また、仕事着



民具収蔵庫の様子

## 卒業生による活動報告

を着る体験もできます。実際に収集された仕事着を着ることもできますが、「めいわ縫子さん」という地元団体が作成した、仕事着の再現品を着ることもできます。「めいわ縫子さん」は、要らなくなった着物や反物を集め、それらを使って仕事着を再現している団体です。メンバーの中には、民具収集活動に関わった方もおり、現在進行形で博物館活動に参加されています。町民によって作られた博物館の活動は、現在も町民によって支えられているのです。寄贈者との距離が近いのも当館の特徴だと思います。以前、民具寄贈者の息子夫婦の収蔵庫案内をしたことがあります。遠くにある民具の取っ手の長さを見て、自分の家のものだと言い当て、父親との思い出を語ってくれました。そのような場面に立ち会えるのは、何ものにも代えがたい貴重な経験だと感じています。

### 小規模館の学芸員の役割

現在ただみ・モノとくらしのミュージアムは、非常勤の館長1名、学芸員(筆者)1名、事務職員2名の計4名で運営されています。普段の開館業務は、学芸員、事務職員の計3名で行っており、受付業務や、観光案内などの来館者対応も、学芸員の業務に含みます。また、当館にはいわゆる常設展示がありません。約300㎡の広い展示ホールを使い、年に2回の展覧会を開催しています。調査、資料選定、解説パネルやキャプション作成はもちろん、展覧会図録作成、広報物作成や展示作業等、展覧会に係る業

務全般も学芸員の担当です。民具などの資料収集に伺うのも当然、学芸員の担当です。これらの業務は、地域おこし協力隊時代からあまり変わりません。オープンしたばかりの博物館のため、試行錯誤をしながら運営を行なっています。

### さいごに

実践女子大学で学芸員の資格を取得するという事は、そのほとんどが美術史を学んでいる方だと思います。学芸員として採用され、自分の専門分野を担当できることもあるでしょうし、専門外の分野を受け持つこともあるかと思います。私自身は、応募段階で専門外であることは重々承知していました。しかし、「只見方式の民具整理」によって民具コレクションが形成された経緯と、博物館の立ち上げに関われることに魅力を感じ、応募を決意しました。当館は民具がメインの博物館ですが、第2回企画展では、地元出身の書家の回顧展を、第4回企画展では、個人コレクターの絵画と当館所蔵の民具とのコラボレーション展を行ないました。この2つの展覧会を実施する時には、掛け軸や絵画の取り扱いを学んだ経験を生かすことができました。また、町内の仏像を借用し、展覧会へ出展する機会もありました。博物館学課程の梱包実習で学んだことを思い出しながら、運搬作業を行ないました。また、多少の差異はありますが、民具を収蔵する際に気を付けるべき事項は、美術と共通します。これからも、実践女子大学で学んだことを生かして、仕事を続けていきたいと思っています。



第2回企画展

『生誕100年 皆川雅舟展—只見が生んだ渾朴の書人—』展示風景



第3回企画展

『奥会津の着る民具〈布〉—糸づくりから現代まで—』展示風景

## 2025年度 博物館実習先一覧

2025年度は、下記の博物館・美術館に実習を依頼しました。  
関係諸機関およびご担当いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

(都道府県別・五十音順)

都道府県	館名	実習生
神奈川県	あつぎ郷土博物館	1名
群馬	アーツ前橋	1名
埼玉	埼玉県立近代美術館	1名
	さいたま市立博物館	1名
千葉	袖ヶ浦市郷土博物館	1名
	千葉市美術館	1名
東京	上野の森美術館	1名
	府中市美術館	1名
学内	香雪記念資料館	5名
	実習生総数	13名

## 博物館実習報告

さいたま市立  
博物館

美学美術史学科4年

## 第1日目 7月17日(木)

本日は職員、実習生の自己紹介から始まり、座学や館内の見学を行なった。座学では昨年度まで小学校の教員をしていた方が担当であったが、博学連携に関しては教員の立場からでもなかなか難しいことであったと話していたことが印象的であった。バックヤードの見学では、収蔵品の多さに驚いた。棚に入り切らないものが多く、限られたスペースで増え続ける資料の保管が課題であるということを知った。午後は、古文書の撮影や土器の梱包、掛軸の取り扱いの実習を行った。実際の資料に触れての作業であったため、慎重な作業が求められたが、実物に触れるという貴重な体験をすることができた。その後は、小・中学生向けの体験講座のための会場設営を行ない、1日目が終了した。

## 第2日目 7月19日(土)

本日は、午前と午後共に縄文土器作りの体験講座の対応を行なった。参加者の誘導と粘土や資料の配布をし、講座の準備を行なった。講座が始まった後は、縄文土器に関する説明がされた。まだ縄文時代について学習をしていない児童がほとんどであったため、実物の縄文土器に触れさせるなどして、縄文土器について興味関心が持てるような工夫をしていた。土器の制作の中でどのようにしたら自分が思い描く形にできるのか悩んでいる参加者もいたため、表情を見たり、作品について「かっこいいね」等のポジティブな感想を話しながらコミュニケーションをとったりし、困っているか見極め、声掛けを行なった。講座の終了後は、参加者を見送り使用した道具の水洗いを行なった。午前と午後、同様のことを行ない、2日目が終了した。

## 第3日目 7月23日(水)

本日は、午前最終日に班ごとに発表する企画展示のテーマの決定を行ない、午後は第2日目と同様、縄文土器造りの講座対応を行なった。ミニ展示企画のテーマの前提は、さいたま市立博物館の企画として来館者に楽しみ、興味を持ってもらえるものであることであり、さいたま市に関連した内容であることである。所蔵されている過去の図録や文書などからどのようなものが資料としてあるのかを確認したり、収蔵品検索システム(早稲田システム)を利用してより詳細な収蔵品を調査したりし、いくつかのテーマの候補を決定した。午後は講座対応であるが、子供だけの講座であるため、より参加者の表情を見ながら制作の補助に入り、終了後は道具の片付けを行ない3日目が終了した。

## 第4日目 7月24日(木)

本日は、まが玉作りの講座対応、企画展示の詳細なテーマと展示資料の選定を行なった。講座対応では、3日目同様に参加者が子供のみであるため、困っている参加者はいないか、危険な作業をしていないかを見ながらコミュニケーションをとり、参加者が作りたい形の再現ができるよう、補助に入った。地元の高校生のボランティアと共に活動したため、高校生への指示も行なった。午後は前日に決めたことを中心に多くの資料を確認し、展示に利用できそうなものを見つけ、その中から共通点を定め班の中でどの資料を担当するかの役割分担を行なった。最後に後日行なう藍染体験の準備として藍染の瓶の搅拌を行ない、4日目が終了した。

## 第5日目 7月26日(土)

本日は午前中に親子藍染体験の講座対応を行なった。Tシャツを絞り染めという技法で染める講座であるため、参加者がどのような模様をつきたいのかを聞き、その模様が再現できるようにアド

バイスを行なった。Tシャツを藍染の瓶から取り出してすぐは緑色であり、空気にさらして酸化していく過程で色が変化していくという説明をし、ただ酸化が終わるまで待つだけでなく、色の変化にも注目ができるようにした。午後は、課題である企画展示で使用する資料の写真的撮影を行なった。資料は県の指定文化財であるため、学芸員の方が資料を扱った。撮影の際の照明に気を配り、資料として神楽面を選定したため、照明によって不気味に見えすぎないように調整を行なった。

## 第6日目 7月27日(日)

本日は午前中に課題の企画展示で使用するキャプションの作成を行なった。細かな指定がなかったため班で話し合い、形式や内容のある程度揃え、展示に統一性を持たせるようにした。キャプションの内容として資料である神楽面が使用された演目や資料の状態について触れ、子供の来館者が多いということに注目し、固過ぎず、簡潔な文章となるように意識した。午後は型染での藍染体験講座の対応を行なった。模様の付け方は異なるが流れは26日(土)と同様のため、ただ講座の進行をスムーズにするだけでなく、どうして染まるのかについて説明し、作るだけで終わらせずに学びの機会となるように、よりコミュニケーションの工夫を行なった。

## 第7日目 7月29日(火)

本日は、岩槻郷土資料館と真福寺貝塚にて実習を行なった。郷土資料館では、企画展の見学を行ない、良い点・改善点を話し合うグループワークを行った。職員の数が少なく展示室内に目が行き届かせることが難しいという館が持つ問題を聞き、効果的な展示を行ないたくても職員の数を確保しなければ難しいということを知った。真福寺貝塚では、現在も作業が進められている発掘現場の見学を行なった。発掘体験では短い時間であったが、いくつもの土器片が見つかり当時作られた土器の数の多さに驚いた。他にも発掘された土器の泥を落とす作業を行なった。土器について知る手掛かりとなる煤やおこげを落とさないよう慎重に洗った。その後、郷土資料館に戻り本日の総括を行なって7日目が終了した。

## 第8日目 8月1日(金)

本日は、午前午後共に小中学生向けのせんす作り講座の対応を行なった。これまでと同様に参加者の誘導や資料・材料の配布を行い、制作時には補助に入った。午前、午後で同じものの制作であるのに、講座の雰囲気は全く異なっており、対応の仕方を変えてただ楽しく制作をするだけでなく、ものの歴史について考えるきっかけづくりにすることが重要だと学んだ。

## 第9日目 8月5日(火)

本日は、火起こし器作りの講座対応、課題である企画展示の制作を行なった。講座では火起こし器についての歴史的背景を説明し、説明だけでなく参加者とのやり取りを交えることで火起こし器についての興味を強くさせるような工夫がされていた。また、講座終了後、実習生も火起こし器を用いた火起こしを体験し、翌日の講座対応の際により具体的なアドバイスができるようにした。企画展示の制作では、キャプションの体裁を整えたものと資料を撮影したものを印刷しハレパネに貼り付けた。キャプションは、資料の横に置くものと想定し、フォントや文字の大きさに気を配った。どの博物館にもあるようなキャプションの制作を通して、実際の展示の過程の一部を学ぶことができ、9日目が終了した。

## 第10日目 8月6日(水)

本日は、企画展示の発表と火起こし器作りの講座対応を行なった。発表の前には、後日のための講座の準備をいくつか行なった。講座の内容はシンプルだが、それまでに必要な準備の多さに気が付くことができた。発表では、展示の意図や資料の選定について班で担当ごとに行なった。その後学芸員の方からの講評をいただいた。改善点としてはキャプションの余白の多さと文字の大きさについて挙げられた。講座対応では前日の体験を活かし、より具体的なアドバイスを行なうことができ、参加者もより集中している様子が見られた。最後に10日間の実習の講評を館長と担当の学芸員の方からいただき、10日目が終了した。

# 袖ヶ浦市 郷土博物館

美学美術史学科4年

## 第1日目 7月23日(水)

8時30分に博物館ロビーに集合し朝礼を行ない、所蔵庫の温湿度管理や、展示室の照明の点灯確認などの開館準備を教えてくださいました。その後、先日まで行なわれていた特別展を見学した。そしてその後博学連携で小学生を対象に行なっているワークシートと、「そではく大解剖」という、来館者目線で博物館を評価するワークシートを実施し、意見交換を行なった。展示について気になった点の意見交換の際、学芸員の方から「展示を作る際にそこを意識していたので気づいて貰えて良かった」と言っていただけで嬉しかった。また、他の実習生の方は自分と専攻が異なっており意見交換の際、自分には無い気付きなどがあって面白かった。明日からの9日間たくさんの方のことを積極的に吸収していきたい。

## 第2日目 7月24日(木)

8時30分に博物館ロビーに集合し朝礼、開館準備を行ないながら館内で実施されていた収蔵環境調査を見学、委託業者の方から調査の目的や方法についての説明を受けた。その後小学校との博学連携事業を行う際のスケジュール、小学校とのやり取り、具体的な内容や工夫点についての講義を受けた。午後は実習の最終課題である展示作成のテーマである永吉台遺跡についての概要説明、市の指定文化財に指定された理由についての説明を受け、実際の出土品を鑑賞した。その後考古学的な観点からのフィールドワークについて、袖ヶ浦市やその近隣地域の歴史や地域博物館の特徴、地域博物館の学芸員に求められる知識を学んだ。

## 第3日目 7月25日(金)

8時30分にロビーに集合し朝礼。実習生のみで開館準備を行ない、2階展示室で1日目に見学した企画展の撤去作業をした。その後研修室で土器の梱包作業をペアに分かれて体験した。土器を取り扱うのは初めてだったが、ペアの人と声を掛け合いながら取り組むことができた。土器は表面に文様があったり、欠けている部分があったりと資料の状態を適切に把握することの重要性を強く感じた。また、梱包したものを別の人に開梱してもらうことで結び目の位置など資料保護だけではなくストレスなく開梱できるような工夫が必要であることに気が付いた。午後は市民学芸員の方と一緒にI P M (総合的有害生物管理) という博物館内の害虫対策や環境整備についての講座を受けた。

## 第4日目 7月26日(土)

朝礼、開館準備を行ない、研修室で袖ヶ浦市郷土博物館の沿革について、資料の受け入れの流れや教育普及事業についての説明を受けた。資料を受け入れられる量や受け入れ後の資料の適切な保管など、博物館における問題点やその対応の実際を知ることができた。その後、今後の最終課題の展示作成に向けて展示を作る流れや学芸員の担う仕事内容についても学んだ。午後は、翌日に行なわれる教育普及事業イベントの内容に関する講座を受け、種子圧痕のレプリカ採取体験で使用する用具の準備、当日のスケジュール確認と配布資料の読み合わせをした。最後にシリコンを用いた種子圧痕のレプリカ採取を実際に行ない4日目の実習を終了した。

## 第5日目 7月27日(日)

ジュニア学芸員体験という教育普及事業に運営補助として参加した。体験の内容は、土器・圧痕についての解説、圧痕調査、圧痕のレプリカ採取、収蔵庫見学である。実習生は受付、体験の補助、収蔵庫見学の案内を担当した。体験中や説明をしていても子ども一人ひとり興味関心のあるもの、関心の向くタイミングが異なっており、運営側として参加することで気付くことが多くあった。反省

点も多くあるが、子どもたちと実際に触れ合ったり、感想を聞いたりと、改めて教育分野への関心が深まった。午後はイベント運営のなかでの感想や意見交換を行ない、最後に今回のイベントについてのホームページ作成をし5日目の実習を終了した。

## 第6日目 7月30日(水)

8時30分にロビーに集合し朝礼、開館準備を実施。6日目から最終課題の企画展の作成が中心の実習になるため、まず研修室で企画展のテーマ決定から終了までの基本的な流れの説明を受けた。自館にない資料を展示したい際の状況調査や、他館から資料を借用する際の事前調査や取り扱い、注意点についても学習した。その後、課題展示の大まかな構成とテーマについて話し合いを行なった。何を一番伝えたい、見せたいのか、そのためにはどの資料を展示してテーマ設定をすればいいのか、助言を頂きながら話し合っで展示要項作成と展示資料の決定をしたが、かなり時間がかかってしまい1から展示を作っていくことの難しさを実感した。

## 第7日目 7月31日(木)

8時30分にロビーに集合し朝礼、開館準備を実施。午前中は作品キャプションの作成を行なった。レポート等の図版の引用と似たようなものだと思っていたが、専門知識のない人にも分かりやすいかつ、読みやすいものとなると使用フォントや文字サイズ、情報の取捨選択など考えることが多くかなり時間がかかってしまった。午後は解説パネルの割り振りや配置構成を決め、パネルの文字数や文末表現、想定する年齢層に合わせて解説パネルの内容を作成した。作品キャプションと同様に、必要な情報を限られた文字数でターゲット層に合わせた言葉選びでまとめることを意識して作成した。

## 第8日目 8月1日(金)

8時30分にロビーに集合し朝礼、開館準備を実施。展示キャプションの推敲と解説パネルの作成を行なった。まず展示資料・鑑賞者双方の安全や照明など展示構成で考えるべきことの説明を受けた。そこで読みやすい文字サイズやフォントなどデザイン的な点と、専門用語の説明や読み仮名など内容的な点に関して、常設展を再度見学して話し合いを行なった。

また展示スペースの横に設置されている復元模型の活用についての助言を頂き、解説と関連させて住居の特徴的な要素を模型から探してもらうようなパネルや、展示資料の印章のレプリカを消しゴムはんこで作成し記念に押しってもらうなど、来館者の方が体験のなかで知識を深められるような内容を追加した。

## 第9日目 8月4日(月)

8時30分にロビーに集合し朝礼、開館準備を実施。午前中は前日に作成したキャプションの確認と修正、パネルの作成を行なった。切り取った際に必要になる余白を考慮せずキャプションのデータを作成してしまい、ただそのまま情報をいれるのではなくその後の工程まで考慮してデータ作成をしなければならないと反省した。また、準備のなかで学芸員が企画作成のほとんどを担う地域博物館では特に資料の知識だけではなく文章作成ソフトや画像処理ソフトのスキルの必要性を実感した。午後は完成したパネルを貼る前に再度実寸サイズの紙で展示の構成や見え方を再度確認した。実際に壁に貼ったりケース内に資料を配置したりしてみると、構想とは異なる点やさらに考えなければならないことも多く、展示を作り上げることの難しさを感じた。

## 第10日目 8月5日(火)

最終日は、まず展示室や収蔵庫に設置されている温湿度計の用紙の交換方法を学んだ。その後前日に確認した改善点を元に展示の最終的な調整、設営を行なった。午後からは、職員の方々の前で展示の概要解説実習を行ない、フィードバックを頂いた。解説実習では焦ってしまいうまく言葉が出てこなかった。頭で考えて文字にすると、実際に言葉にして人に伝えるのはまた違う分野なのだ改めて実感した。実際に展示を作成したことで学芸員は資料の知識だけではなく画像処理・文章作成、工程を把握して動く能力なども必要なことが分かった。最後に襖の下貼り文章の取り扱いを体験し、10日間の実習が終了した。

## 博物館実習報告

## 府中市美術館

## 美学美術史学科4年

## 第1日目 7月29日(火)

9時50分に会議室に集合し、学芸員の方と実習生で自己紹介を行なった後、府中市美術館概要に沿って、事業や収集方針、建物の構造について学んだ。美術館という施設の全ての人に寄り添った活動と地域の美術館としての地域の人に寄り添った活動をどのように両立させるかや、学芸員の方が以前に勤めていた北海道の美術館と府中市の美術館を比較した際の教育普及活動の地域差についてのお話も伺った。午後は館内を見学し、施設についての理解を深めた。バックヤードを見学した際に、作品や図書、展示に関わるものがあふれかえってしまう現状やそれに対する学芸員の方の考えを知ることができた。その後は会議室に戻り、スライドで作品を見ながら府中市美術館のコレクションについて学んだ。新収蔵品を迎える際に苦労する点やデータベースを作る際に苦労する点を伺い、実際に作品調査書を書いた。バックヤードや教育普及活動の実態などを通して、美術館の活動の理想と現実の差について考える1日となった。

## 第2日目 7月30日(水)

9時50分に会議室に集合し、コレクション展をつくる際に学芸員が考えることや展示について学んだ。来館者に作品を見てもらうことで、作品や美術館に愛着を持ってもらいたいというコレクション展を行なう理由や、作品展示を行なう際はその作品を見てもらうために適切な間隔や隣り合う作品との相性を考えるという現場での実体験に基づくお話を伺った。展示を行なう際に第一に考えるべきは作品の安全である。作品の痛みを最小限に抑えるために展示室の環境を整えることや、鑑賞者との接触防止のための対策についても学んだ。これらのことを踏まえ、実際に開催中のコレクション展の展示室へ行き、自分が注目した作品、不便を感じた点、子どもや高齢者などハンディキャップを持つ人にとって不便と考えられる点を発見し、共有を行なった。午後には、1日目に終わらなかった実習生の自己紹介を行なった後、4人1グループに分かれ、最終日の作品の取り扱いの際に扱う作品を決定し、その作品の文献調査をしてグループごとに発表を行なった。学芸員は作品と向き合う仕事であり、府中市美術館の現場では人々に作品の良さを理解してもらう空間づくりを行なっていることを理解した。

## 第3日目 7月31日(木)

9時50分に会議室に集合し、府中市美術館の教育普及について学んだ。府中市美術館の教育普及事業は公開制作プログラム、鑑賞教室、ワークショップ、連携事業の大きく4つに分けることができ、それぞれに力を入れていることや市立の美術館ならではの連携事業を多く行なっていることを理解した。その後は、学校と美術館の違いや対話型鑑賞教室についてなど教育という観点から美術館について考えた。午後は作品保護や保存に関わることを学んだ。保存修復の具体的な内容として、環境整備・文化財IPMと作品保全の2点が挙げられた。作品保全としてコンディションチェックがあり、4つのグループに分かれて2グループずつ収蔵庫でコンディションレポートの作成を行なった。収蔵庫へ行かない2グループは会議室で府中市美術館のコレクションから5点を選び、コレクション展を考えるというワークを行なった。テーマを決め、作品を選び、順番を決め、タイトル、テーマの説明を考え作成し発表をした。自分たちが小規模ながらコレクション展を考えたことにより、コレクション展をつくるうえでは多くのことに考慮しなければならないことを理解した。1日を通して、美術館の活動はその環境で何ができるかを考え実行に移すことが必要

であると考えた。

## 第4日目 8月1日(金)

9時50分に会議室に集合し、開催中の企画展を見学し、企画展の際に考えることや注意点について学んだ。今回開催中の企画展は「ばれたん旅行社ゆめの国」という子供向けの展覧会であった。そのため、子供向けの展覧会を考える際の工夫や注意点を伺うことができた。工夫として、子供の身長に合わせてセンターラインを110cmと大きく下げることや子供の安全も作品の安全も守るために作品を全てケースに入れるといったことが挙げられる。午後は館長と実習生で自己紹介をした後に「これから(2025～)の府中市美術館には何が必要か?」を題材にグループワークをし、発表を行なった。話し合ったことは、新しい方針、建築改修、新しい収集方針の3点である。新しく何が必要かを考える際、現在の施設の設定や方針を見直す必要があるため、施設についてより深い理解へと繋がった。

## 第5日目 8月5日(火)

9時50分に会議室に集合し、企画展の概要や企画展の作り方を学び、学芸員の方に企画展に関わる質問に答えていただいた。様々な話題の中で印象に残っていることは府中市美術館の図録には二通りあるというお話である。府中市美術館でつくり、印刷を行なって府中市美術館で販売する場合と、出版社の刊行物として出版し、一般書籍として販売を行なう場合である。後者は美術館の宣伝にもなる。午後は額・軸の取り扱いを行なった。実際の作品を扱う際の緊張感を実感した。府中市美術館が開かれた美術館であるのは、学芸員が鑑賞者に楽しんでもらいたい、美術の良さを共有したいと考えているためであることを理解した。

## 第6日目 8月6日(水)

9時50分に会議室に集合し、第3日目の教育普及についての振り返りを行ない、公開制作プログラムや府中市美術館以外のプログラムについて学んだ。その後、公開制作室で施設について詳しいお話を伺った。公開制作プログラムは、来館者が創造のプロセスと現代の美術表現の一環に触れるとともに美術作家との交流から様々な創造的発見を得るためのものである。作家としても普段とは異なる非日常の環境を体験できる場であり、美術館としても作家との関係性を築くことができるという利点がある。午後は創作室に移動し、府中市美術館のワークショップであるアートスタジオの概要について学んだ後、4人1グループに分かれて参加者の世代や事情に合わせたワークショップを考案した。作品が完成するまでの過程を考えることにつながる企画を学んだ1日となった。

## 第7日目 8月7日(木)

9時50分に会議室に集合し、美術館の広報について学んだ。広報とは、情報発信を通じて、関係者との望ましい関係を築くことである。府中市美術館における関係者として、府中市、来館者、近隣住民、来場検討者、美術館関係者などが挙げられる。情報発信においては美術館の情報を正しく発信することが求められる。多くの人に興味を持ってもらうためにどう伝えるべきかについて悩んでいるというお話を伺った。その後、学芸員の調査活動について学んだ。学芸員の調査は「作品調査」「展覧会調査」「文献調査」に分けられる。調査を行なうことで、収集、展覧会、災害時の対応などにつなげることが可能となる。午後は看土を中心として業務委託の内容について学んだ後、展示室で看土業務を行なった。学芸員とは異なる現場の見方を学んだ。

## 第8日目 8月8日(金)

9時50分に会議室に集合し、収蔵庫に移動して巻子の取り扱いを行なった。本物の作品を扱うことに対する緊張感を持って取り組んだ。午後も収蔵庫に移動し、第2日目に資料研究を行った作品の取り扱いを行なった。作品の状態は実物を見なくてはわからないことであり、作品研究の重要性について学んだ。その後は会議室に戻り、実習に関する感想を実習生が一人一人述べ、府中市美術館での博物館実習を終えた。

## 香雪記念資料館

美学美術史学科4年

## 第1日目 7月23日(水)

初日は学芸員室に集合し、今後の5日間の実習内容について確認した。先生方に先導いただき、1階の企画展示室、下田歌子記念室、地下の収蔵庫を見学した。1階の企画展示室と下田歌子記念室では鑑賞しやすい展示空間作りの観点から、作品を展示するにあたって最適な温湿度を保つための除湿機の設定と、照明の調整具合について解説していただいた。「前室」と呼ばれる道具の保管と空調の設定を行なうスペースは、少しでも調整を誤ると作品の損失に繋がる場所であるからこそ、厳格な雰囲気を感じた。地下の収蔵庫は扉が二重になっており、入室の際は入口で身体の塵を払う必要があった。部屋に入った塵を綺麗にするというよりは塵を持ち込ませない努力がされていることを理解した。大学の建物に内蔵されているという特質上、喫煙所の撤廃と、食堂では炎上の原因になる火を使用せずにIH式を採用するなど、財産の紛失に繋がる恐れのある行動を無くしていることを新たに知った。

午後からは座学で、香雪記念資料館の活動と概略について学んだ。館内の展示以外にも、館外の施設と連携して研究を行なっていることを理解した。中でもイラストレーターを使用して、展示の図面作成からパンフレットなどの配布物が完成するまでの制作過程の説明が印象的で興味深かった。パンフレットは展示内容よりも先に目に入る要素であるからこそ、紙面に掲載されている作品を引き立たせるデザインが用いられているのだろうと考えた。

座学が終わった後は、1階の企画展示室と下田歌子記念室にそれぞれ配置されている除湿機に溜まった水を処分し、閉館以降も空間を維持できるように道具の位置を設定して、1日目の実習が終了した。

## 第2日目 7月24日(木)

午前中は正方形の展示台と茶碗を用いて、テグスの張り方を学んだ。テグスとは、割れ物の作品が落下しないように固定する補強道具である。鑑賞の妨げにならない無色透明で極細のテグスが用いられるため、視認がしにくい上に指先の動きが繊細に求められるものであった。テグスは役割上作品に直接接触するものになるため、強く張りすぎると作品の損傷に繋がる可能性があるが、張りが弱くても作品が固定されずに落下してしまう危険性があるため、扱いには細心の注意を払わなくてはならないものであることを実感できた。

午後からは、博物館における教育普及について学んだ。目的によって「ギャラリートーク」「講演会」(シンポジウム)「ワークショップ」「博学連携」の事業形式が使い分けられ、年齢層を問わずに理解しやすく伝える工夫が必要である。後日実習で行なうギャラリートークが、学芸員から一般公衆に対する教育的配慮の基に実施されることを理解した。

## 第3日目 7月28日(月)

午前中は掛軸の特徴と扱い方を学んだ。共箱に収められた掛軸を取り出し、展示するまでを通して行なった。鑑賞者全体の平均身長から割り出した目線の高さを「アイレベル」と呼び、作品の中

心が地面から140cmになるように専用のレーザーを用いて調整した。レーザーの機械は三脚で自立する背丈ほどの高さであり、光の発射部分は少し力を加えれば簡単に動くものであった。しかし、細かな動きが苦手なので、想定した位置に光を当てるまでには積極的な連携が必要だった。僅かな衝撃で作品の位置が動いてしまうため、理想の地点に設定するまでに苦労した。

午後からは額の特徴と扱い方を学んだ。額は掛軸と形状が異なるため、アイレベルを150cmに設定して位置を調整した。壁一面の寸法と、額全体の寸法から縦横の中央値を割り出し、額に取り付けるフックの位置と作品同士の間隔を計算して展示する。展示後は額の上に気泡の位置を読み取って角度を測る形状の水平器を用いて細かく位置を測定した。作品1つを壁に展示して問題がなくなるまで、多くの道具と労力が費やされていることを実感した。

## 第4日目 7月29日(火)

午前中は、國學院大學博物館の特別展「アイヌモシリ展」を見学した。照明にカバーを被せることで照度を調整し、作品の下に影を極力作らないようにしている点など、実習を通して学んだ展示方法が鑑賞しやすい空間作りに実用されていることを発見できた。7月末で入口付近に「夏休みの自由研究にお勧め」といったパネルが展示されており、開催時期によって特定の年齢層にも興味を惹きやすくする工夫がされていた。民族衣装を着用して撮影する体験が可能であり、作品を見てキャプションの文字を読む他にも展示方法で集中力を高める効果があると感じた。

午後は、作品解説のパネル制作を行なった。香雪記念資料館では「ハレパネ」という軽量で加工が簡易なボードを使用している。パネルの角を斜めに切り落とすことで照明を当てた際に影が出来ないようにする取り組みを実施していることを知った。パネルが完成した後は、先生方と実習生同士で鑑賞を行なった。前提としてキャプションは文字を通して情報を与えるためのものであるため、閲覧の妨げにならない塩梅のデザインが難しかった。他の実習生の作例を見て、可読性を利用したレイアウトであったり、作品の色彩と類似する配色を用いて情報を関連付けやすくするような工夫がされており、大変興味深かった。今後はキャプションだけでなく、展示パネルを制作する機会があれば今回の実習で得た経験を参考にしたい。

## 第5日目 7月30日(水)

午前中は準備時間をいただき、ギャラリートークの最終確認に励んだ。昼休憩を挟んで、午後からは1階の企画展示室でギャラリートークを実施した。実際にギャラリートークを行なう側になると、口頭で伝わりにくい熟語や専門用語を使用しないようにする意識であったり、様々な工夫が必要になることが実感できた。抑揚の付け方や参考資料の見せ方に失敗した瞬間もあったが、自身の専攻分野に基づいた内容構成が出来たと自負している。また、自分の考えた内容で先生と実習生から評価をいただけたことがモチベーションに繋がった。講評の後は日誌を書く時間をいただき、5日間の実習が終了した。

途中、次回以降の博物館実習で使用する額縁に入れる作品を実習生で選定したところ、捕鯨を題材にした浮世絵が“文化的な懸念”があるとして再度選び直すことになった。実習生側は「作品の題材に偏りが出ないようにする」という基準で静物画、人物画、風俗画など可能な限り多くの種類を選定したが、施設の方針によっては、このような価値観は相応しくない考え方であることを学んだ。学芸員の責務には、展示を通して与える影響力を自覚した上で、多文化への配慮も必要になってくることを実感した。



## 梱包実習報告

3年次の学内実習では毎年、ヤマト運輸株式会社東京美術品支店から、美術展覧会のための作品輸送に関わる専門の作業員を講師に招き、梱包実習を行なっています。

今年度は、最初に作業時の服装や身だしなみの大切さ、作品取り扱いの際の基本的な心構えについてお話いただき、その後、実習を行ないました。実際に仏像の手の梱包、お茶碗の梱包を体験したほか、薄葉紙や綿枕の扱い方、桐箱の紐の結び方についても学びました。最後に絵画の梱包と運搬について実演を交えたお話をうかがいました。そして実習終了後には美術専門輸送車の内部を見学させていただきました。





# 博物館学課程の受講について

## 1. 学芸員とは

博物館法によって定められている美術館や博物館、資料館などで働く専門の職員を学芸員といいます。学芸員は資料の収集、保管、展示などの様々な実務を行なうとともに、展覧会の企画や所蔵品の調査研究といった専門的な仕事を担っています。学芸員には、歴史や民俗、自然科学系博物館の学芸員や動物園の学芸員まで幅広い内容を含みますが、本学の博物館学課程は、美術館学芸員の仕事に関連する知識を学ぶように構成されています。

## 2. 資格取得に必要な科目・単位数

学芸員資格を取得するには必修科目19単位と選択必修科目12単位以上を修得しなければなりません。卒業に必要な単位数に含まれない科目も履修しなければなりませんので、受講にあたっては十分な計画と最後までやり遂げる熱意を持って臨んでください。

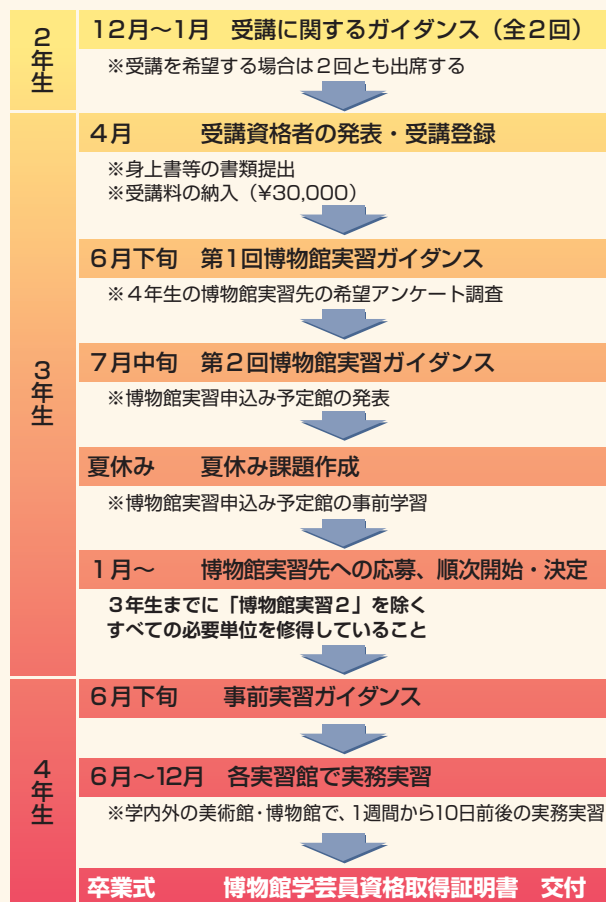
## 3. 受講にあたって留意して欲しいこと

- (1) 博物館学課程の受講は3年生から始まります。受講にあたっては2年生の後期にオリエンテーションを行ないます。履修要項をよく読んで臨んでください。
- (2) 受講が始まってからは皆さんの資格取得をサポートするために、「博物館実習1b」の中できめ細かい指導（個別も含め）を行なっています。授業の日時や呼び出しについては、随時掲示板とmanabaで連絡しますので、こまめにチェックしましょう。
- (3) 授業でも美術館・博物館への見学実習を行いますが、普段からも積極的に足を運ぶようにしましょう。

## 4. 博物館実習について

- (1) 4年生になると「博物館実習2」で実際に美術館・博物館での実習を行ないます。実習先は事前アンケートや皆さんの専攻分野を基に、各実習先の受入条件などを考慮して、博物館学課程で決定します。希望通りにならない場合もありますが、実習先の決定は課程に従ってください。
- (2) 3年生までに「博物館実習2」を除くすべての必修科目および選択必修科目を履修し、単位を修得していないと、「博物館実習2」を履修することが出来ません。しっかりと努力しましょう。
- (3) 博物館実習は、美術館・博物館の方々のご厚意によって受け入れていただいています。自分の行動に責任をもち、貴重な機会であることを心得たうえで、実習に参加してください。

## 受講の流れ



## 資格取得に必要な科目・単位数

	科目名	単位	年次
必修 (19単位)	博物館学入門	2	3
	博物館経営論	2	3
	博物館資料論	2	3
	博物館教育論	2	3
	生涯学習概論	2	3
	博物館情報・メディア論	2	3
	博物館展示論	2	3
	博物館資料保存論	2	3
	博物館実習1a	1	3
	博物館実習1b	1	3
選択必修 (12単位以上) ※	博物館実習2	1	4
	美術史概論a	2	3
	美術史概論b	2	3
	工芸史概論a	2	3
	工芸史概論b	2	3
	文化史概論a	2	3
選択	文化史概論b	2	3
	知的財産研究	2	3～
	アート&パブリッシング	2	3～
	パブリック・プログラム研究	2	3～
	保存修復a	2	3～
保存修復b	2	3～	
保存修復c	2	3～	

※詳しくは履修要項を確認してください。

# MUSEOLOGY

## MUSEOLOGY No.45

発行日 2026年3月3日  
発行者 実践女子大学 博物館学課程  
〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49  
TEL 03-6450-6899 FAX 03-6450-6812  
編集 山本 樹(文学部美学美術史学科 助教)  
印刷所 日野台印刷株式会社

